

学会ニュース

目次

・2015年度学会費納入のお願い	1
・第37回大会および第38回大会について	2
2015年国際18世紀学会ロッテルダム大会 セッション報告	
・代表幹事再任にあたって	7
・事務局より	8

2015年度学会費納入のお願い

代表幹事 長尾伸一

学会費未納の会員の方については払い込み用紙を同封いたしましたので、年会費の納入をお願いいたします。年々、会計状況が厳しくなっております。活発な学会活動の維持と発展のため、会員の皆様のご協力をいただきたいと思います。

第37回大会および第38回大会について

今年度の第37回大会は、2015年6月20日（土）、21日（日）に東京大学駒場キャンパスで開かれ、盛会のうちに終了しました。開催校責任者の大石和欣会員をはじめ、東京大学の方々に篤くお礼申し上げます。

共通論題「18世紀の舞台音楽」のコーディネーター武田将明会員、ミニ・シンポジウム「デジタル資料の展開と古典研究の可能性に向けてー思想／文芸／歴史研究と手法としての情報ー」のコーディネーター深貝保則会員およびほかの発表者の方々、コンサートの出演者の方々にもお礼申し上げます。

来年度の第38回大会は愛知県立大学で開かれる予定です。開催校責任者は大野誠会員です。詳細は追ってお知らせします。

【2015年国際18世紀学会ロッテルダム大会 セッション報告】

第14回国際18世紀学会大会はオランダのロッテルダムのエラスムス大学で、2015年の7月26日から31日にかけて開かれました。

日本18世紀学会パネル「18世紀における効用と社交性の東西比較」

オーガナイザー：長尾伸一（名古屋大学）

報告者：橋本周子（滋賀県立大学）、ユ・ドンジェ（成均館大学校）、高橋博巳、坂本貴史（立教大学）、福田名津子（一橋大学附属図書館）、松波京子（名古屋大学附属図書館）

今回も長尾伸一氏をオーガナイザーに、「有用性と社交性」のテーマで都合6名がセッションを行った。日本関係は気鋭の橋本周子・坂本貴志両氏とともに、私も老体に鞭打って参加した。お二人はそれぞれ仏・独の専門家ながら、橋本氏は柏木如亭の『詩本草』を当時の文人社会のなかに定位し、坂本氏はキルヒャーと山片蟠桃を取り上げて世界の複数性についての斬新な発表をされた。ほかに西洋方面では英国を中心に松波京子氏の郵便制度の比較、福田名津子氏のA・ファーガスンについての発表と、韓国から Dongjae You 氏の“Artistic activities of waegwan and roles of 'opened space' culture and information are exchanged in late Joseon Dynasty, waegwan and dejima”と題する、倭館と出島を扱った発表が行われた。これまではセッションの前に、日韓双方の発表者が予備的な打ち合わせを行ってきたが、今回は韓国から一名ということもあって国内グループだけで研究会を行ったので、全体として十分な討議に至らなかったのが惜まれる。しかし当初から目指してきた東西比較の実がようやく上がろうとしており、今後の展開が楽しみである。

会場はエラスムス大学で、かつて渡辺一夫訳でその著作に触れた人間には、初めて訪れるという感じがしなかったのも不思議である。私事で恐縮ながら、12年前のロサンゼルス大会に初めて参加して朝鮮通信使に言及し、鄭珉氏より関連資料の複写を提供していただいたのが、私の学芸共和国研究の出発点となり、そのテーマでモンペリエ、グラーツと渡り歩いて、そろそろ潮時と考えていたのであるが、この3月に停年でサンデー毎日の身となってみると、いましばらく余生を彷徨するのとも考え直し（ということは、皆様には相変わらずご迷惑をおかけするわけだが）重い腰をあげた次第。せっかくエラスムスの故郷で開催される今年こそ、学芸共和国をテーマにと思わないではなかったが、今年のテーマが「有用性と社交性」なら、昔、取った杵柄で売茶翁の茶事を考え直す機会にもなるかと、18世紀の茶事の行方を売茶翁一木村兼葭堂一上田秋成一田能村竹田とたどって、新たに武元北林・浦上春琴・頼山陽にまで展開することができたのは、思いがけない収穫だった。最終日の会場には寂寥感が漂っていたが、さいわいグリニッチの若い研究者にも興味をもたれたようで、安大会先生と教え子の発表者 You さんともしばし歓談したほか、カフェを出たところで、かつての共同研究者で現在モンペリエにお戻りのクレール先生とばったり出会って、久闊を叙することもできた。以上、断片的ながら、報告に代えたい。（高橋博巳）

Fiction and Perception: the Novel and the Theatre as Devices for the Enlightenment

オーガナイザー：武田将明（東京大学）

報告者：久保昭博（関西学院大学）、武田将明（東京大学）

大崎さやの（東京大学）、菅 利恵（三重大学）

国際18世紀学会ロッテルダム大会の最終日、斉藤渉会員を中心とする「啓蒙とフィクション」研究グループのパネル発表が行われた。午前中の二つのパネル“Enlightenment and Fiction I, II”に続く形で、午後には“Fiction and Perception: the Novel and the Theatre as Devices for the Enlightenment”と題されたパネルが企画され、武田が司会を担当した。

最初に、フランス20世紀文学・批評理論を専門とする久保昭博（関西学院大学）が“Cultural and Social Functions of Fiction: Pragmatic Approach”と題する発表を行った。久保はJean-Marie SchaefferのPourquoi la fiction? (1999) など最新のフィクション論を紹介し、18世紀に小説や演劇などのフィクションが果たした社会的機能を考察する際の理論的な基盤を提供した。次に武田が“Fiction and the Glorious Revolution: Providence in Defoe’s Writings”という発表を行い、初期の長篇詩、中期の戯曲形式のコンダクト・ブック、そしてRobinson Crusoe (1719)という、時期も形式も異なる三つの作品を通じて、デフォーがフィクションにおける政治表象をいかに発展させ、近代小説という新たなジャンルを生み出したかを解説した。大崎さやの（東京大学）による三番目の発表“War and Fiction in the Work of Goldoni”では、戦争を扱ったゴルドーニの喜劇と音楽劇を四作取り上げ、執筆時期や劇の形式に応じてフィクション性の度合いを変化させつつも、兵士たちへの同情と戦争への批判を表明し続けたことが示された。最後に菅利恵（三重大学）が、“Contingency and Fiction: On Goethe’s Wilhelm Meisters Lehrjahre”という題で発表した。ドイツにおける啓蒙を意図した演劇改革運動に対するゲーテの懐疑的な態度をWilhelm Meisters Lehrjahre (1796)に読み取り、ゲーテが古典主義演劇に向かった経緯を解明した。

いずれの発表も、18世紀のヨーロッパにおいて、フィクションが啓蒙の道具として活用され、劇場の観衆や小説の読者の感性に影響を与えたことを明らかにしていた。しかし同時に、この時代のフィクションという概念は、常に中産階級の台頭と共に重要になったリアリズムとの緊張関係から理解されねばならないこと、そして同じヨーロッパでもリアリズムの浸透の度合いや社会的な条件の違いがあり、デフォー、ゴルドーニ、ゲーテの三者三様の創作活動はこの側面からも理解される必要があることが明らかとなった。また、フィクション性そのものが多様に現れた18世紀ヨーロッパの文学を考察する上で、現代のフィクション論が有効であることも、改めて確認された。

充実した発表と、活発な質疑応答により、いささか制限時間を超過したものの、まだまだ時間が足りない印象であった。（武田将明）

Enlightenment and Fiction

オーガナイザー：齊藤 渉（東京大学）

報告者：齊藤 渉（東京大学）、後藤正英（佐賀大学）

隠岐さや香（広島大学）、上村敏郎（獨協大学）

2012年にスタートした私たちの共同研究にとって、今年7月ロッテルダム・エラスムス大学で開催された国際18世紀学会第14回大会国際会議は、最初から目ざしていた成果発表のための舞台であった。「私たち」というのは、科研費共同研究プロジェクト「啓蒙期におけるフィクション使用の多様な形態と機能に関する総合的研究」参加メンバーのことである。本学会でも、昨年度大会（福山市立大学）の共通論題（2）「啓蒙とフィクション」として、久保昭博、大崎さやの、隠岐さや香、武田将明の各氏に登壇していただいたが、国際学会はその成果を踏まえつつ、科研のメンバー8名全員が報告をする場となった。

だが、国際学会は1セッションが90分、発表数も最大4つに制限されている。このため、武田さんと私をそれぞれ責任者として2つのパネルを出すことになった。私のセッションには、上村敏朗、後藤正英、隠岐さや香の3名に加わってもらい、タイトルは昨年共通論題と同じく「啓蒙とフィクション（Enlightenment and Fiction）」とした。

このパネルはhalf-open方式（企画者の設定したテーマに対して、予定された報告者以外にも発表者を募る）としたため、海外からの申込みも数件あったが、諸般の事情で最終的に加わったのはSaurabh Pandkar氏1名のみである。5名の発表者がいるので、セッションを2つに分け、前半で私、上村さん、後藤さん、後半でPandkarさん、隠岐さんが発表した。そのため進行上の余裕ができ、ディスカッションに十分な時間を確保できたことは幸運といえよう。

以下、各発表の内容を簡単に紹介しておきたい。

まず、イントロダクションを兼ねて、私が報告を行なった（“Public Use of Fiction”: A Typology of Fictional Discourse in the 18th-Century Germany）。18世紀に広く見られる「非文学的」なフィクションの類型論を試みるとともに、特に、虚構性を明示しない架空の書簡（「読者の手紙」を装うテキスト）が、にもかかわらず著者と読者の間で虚構として了解されていたこと、こうしたタイプのテキストが「啓蒙」の構成的要素であることを論じた。

続く上村さんの発表（The use of fiction in political pamphlets in 1780's Vienna）は、ヨーゼフ2世期のウィーンで刊行された多数の政治的パンフレットを詳細に分析しつつ、政治への批判を含むこれらのテキストが検閲を回避する手段として、さまざまなフィクション的方策を用いていることを示すものだ。

前半の最後は、後藤さんの発表（Functions of the Fiction in the Religious Controversy: On the Case of Lessing's “Nathan the Wise”）である。レッシングの『賢者ナータン』に劇中の挿話として組み込まれた有名な指輪の寓話を取り上げ、そこに、検閲を避けるという消極的機能だけでなく、論題への批判的距離をもたらすという積極的機能を指摘する刺激的な議論であった。

セッション後半は、Pandkarさん（プネー大学／インド）の講演（Voltaire's ‘Micromégas’ and ‘Plato’s Dream’: The mutuality of the age of enlightenment and the early science fiction）で再開した。ヴォルテールの2つのテキスト「マイクロメガス」「プラトンの夢」に着目し、自然科学的知識を背景として既成・既知の思考体系が脱中心化されていること、ここに（ユートピア／ディストピアの両極に振れうる）SF的想像力の萌芽が見出しうることを論じていた。

最後の隠岐さんの発表（Fiction, mathematics, and doubt concerning Providence in the eighteenth century）は、コンドルセ『人間精神進歩史』第十期冒頭で、人類の将来の発展に話題を

転じる一節に着目する。蓋然性や確からしさなど確率論のキーワードが、その思想史的背景にあった摂理の観念から自立していき、それとともに18世紀の哲学的フィクションの系譜からも離れていく過程を示す、きわめて啓発的な議論であった。

報告内容に関する質疑は、各パネルの最後にまとめて行なった。発表は、結果として、前半がドイツ語圏、後半がフランス語圏に集中する形となったが、それを補完するような質問も出たおかげで、広がりのあるディスカッションができたと思う。残念なことに、パネルが割り当てられたのは大会最終日（7月31日）であり、どれだけの参加者が来てくれるか不安もあったが、70席ほどの会場はまずまずの盛況であった。

企画者としては反省すべき点も少なくない。英語での発表は初めてであったが、我ながら自分の英語力についてさすがにこれはまずいと痛感した。司会としてもっとうまくディスカッションを盛り上げられなかったの残念である。また、関連しそうなパネルに出向いていき、積極的にコンタクトをとっていれば、もっと多くの参加者を迎えることもできたかもしれない。

唯一の外部参加者であったPandkarさんはまだ修士課程に在学中という。堂々たる発表だったが、彼のように若いうちから積極的に国際学会に参加し経験を積むことの重要性をあらためて認識した次第である。（斉藤渉）

Saint-Lambert : de l'économie rurale au commerce colonial **サン＝ランベール：農村経済から植民地交易へ**

オーガナイザー：井上櫻子（慶應義塾大学）

共同オーガナイザー：シルヴァン・ムナン（パリ＝ソルボンヌ大学名誉教授）

報告者：ユンマ・シャララ（パリ第4大学）、
アルフレッド・ショーダン（ルンド大学）、井上櫻子（慶應義塾大学）

本セッションは、当初、本大会の共通テーマ「マーケティングの開始：18世紀における貿易、商業」にあわせ、ジャン・フランソワ・ド・サン＝ランベール（1716-1806）の経済思想について検討する目的で、本報告書作成者がシルヴァン・ムナン（パリ第4大学名誉教授）とともに企画したものである。しかし、ユンマ・シャララ氏（パリ第4大学博士課程修了）およびアルフレッド・ショーダン氏（ルンド大学研究員）をパネリストとして加えた結果、サン＝ランベールというこれまであまり光の当てられてこなかった作家について、思想的観点および文学的観点から多面的に検討する90分となった。

シルヴァン・ムナン氏は、『四季』を主たる分析の対象とし、経済発展のために農村の大地主が果たすべき役割についての詩人の考察を紹介した。ユンマ・シャララ氏は、『四季』に展開される自然描写に注目し、そこに織り交ぜられる詩人の所感をたんねんに分析しつつ、前ロマン主義時代における叙情詩の再生にサン＝ランベールが果たした役割について説得的に議論を展開した。アルフレッド・ショーダン氏は、サン＝ランベールの『四季』がどのように同時代のスウェーデンの詩人ヨハン・ガブリエル・オクセンシェルナに受容されたか明らかにした。サン＝ランベールの他国における受容については、本報告書作成者はまったく不案内な分野であったから、新鮮な驚きをもってショーダン氏の発表を聞いたのは言うまでもない。最後にオーガナイザーの井上が、『百科全書』の項目「奢侈」と『四季』に展開される商業、奢侈、文明の発展についての考察との関連性について考察し、『四季』には、百科全書派の思想家としての詩人の矜持と使命感があふれていることを示した。

あまり研究の進んでいない作家についてセッションを設けるのには、正直なところ、当初いささかの不安があった。しかし、セッションには、ジャック・ドリールやアンドレ・シェニエなど、18世紀

の韻文を対象に研究を進める専門家が集まり、サン＝ランベールの作品と19世紀以降の詩との関連について活発な議論が展開された。日本では18世紀のフランス詩を専門とする研究者はごく限られているから、本報告書作成者にとっては海外に向けて研究成果を発信することの意義を再確認する貴重な機会となった。（井上櫻子）

De la culture héroïque à la société du goût : statut des femmes et changement des mœurs

「洗練」か「墮落」か？：18世紀における「習俗」と女性のステータス

オーガナイザー：玉田敦子（中部大学）、セリーヌ・スペクトール（ボルドー第3大学）

報告者：福田真希（中部大学）、ガブリエル・ラディカ（ピカルディ大学）、玉田敦子（中部大学）

近代社会の成立において「習俗」の概念の変容は大きな役割を果たしてきた。この習俗概念の変容について、ポーコックの『徳・商業・歴史』は18世紀を、古代ギリシアに淵源をもつ「市民的徳 (civic virtue)」から、商業社会の基盤となる「近代的」倫理への転換期と位置づけている。とはいえ、18世紀フランスにおいては、イギリス思想の影響を強く受けたモンテスキューやヴォルテールは、ポーコックの論じるとおり、商業の発展にもとづく習俗の「洗練」に対して好意的であったものの、商業の発展とその結果である奢侈、女性的な文化は、それぞれ必ずしも肯定的に受け入れられていたわけではない。それどころか女性は「習俗の墮落」の要因と見なされるようになり、前世紀にサロンや宮廷を発信源として成熟した女性的な文化に対する批判が高まっていく。たとえば『百科全書』の項目「習俗 (mœurs)」は、「女性はフランスにおいて習俗を墮落させる原因をなした」としているが、ここには明らかに古代的な「市民的徳」にもとづく「男性的」な「習俗」を優位に置く価値観が現れている。

本セッションは、こうした問題意識を共有するセリーヌ・スペクトール教授と玉田が「18世紀フランスにおけるミソジニー」というテーマにおいて議論を重ねるなかで練り上げた企画である。当日は、セリーヌ・スペクトール教授による趣旨説明の後、まず福田真希氏が「マリー＝アントワネット裁判と魔女裁判—主権の男性的性質？」という題目の報告をした。福田氏の報告は、1793年のマリー＝アントワネット裁判における起訴状と16世紀の魔女裁判にかんするジャン・ボダンのテキストを比較し、絶対主義的主権と民主主義的主権という一見相反するふたつの主権が誕生する時期に、女性を政治の舞台から排除するディスクールが共通して見られたことを明らかにし、主権そのものが男性的な性質をもつのではないかということを示すものであった。

次にガブリエル・ラディカ氏が、「ルソーにおける女性・習俗・言語」という題目の報告をした。ラディカ氏の報告は、ルソー作品の中でも特に「女性・習俗・言語」の結びつきを重視する『ダランベール氏の手紙』を主な分析対象としたものであった。ラディカ氏によれば、「女性の地位」は『手紙』における中心的な議論であるにもかかわらず、従来の研究においては、この点に関する検討が十分なされていない。またルソーは一般に「習俗を腐敗させるのは女性である」という女性批判の論拠を提供する作家と見なされているが、実際には、習俗の腐敗を根拠とする女性批判は18世紀フランスの思想一般に広く見られるものである。ルソーは、習俗の維持、すなわち習俗を墮落から守るためには、男性と女性がとりもつ関係性が何よりも重要な役割を果たすとした上で、文明化された社会において「習俗の墮落をもたらす女性」と、自然の中に生きて「純粋な習俗を保つ女性」を峻別し、後者を理想的な女性像としている。

最後に玉田が「男性性の礼賛と市民的徳の変容」という題目の報告をおこなった。18世紀フランスにおいて「習俗の墮落」をもたらす女性的な文化と対置され、高い価値を付与されるのは、古典古代の文芸作品に範をとり「英雄」的な行為に身を捧げる「男性」である。フランスでは、1701年にボワローが増補改訂したロンギノス『崇高論』の序文で、コルネイユ作品の「英雄性」をそれまで古典古代に固有の価値で

あった「崇高」と称したことが端緒となり、以後ボワローの「崇高論序文」は典拠として参照されるようになる。さらに、この「崇高」はエドモンド・バークによって「ロココ的」、すなわち女性的かつフランス的な「美」の概念と対置されることにより「男性的価値」としての地位を確立していく。

本セッションが目指したのは、18世紀フランスに固有のミソジニーと「習俗」の問題を、18世紀後半のフランスにおいてサロン文化が洗練させていった「女性的」なる「趣味」と、七年戦争以後におけるナショナリズムの台頭と相俟って勢いを強めていくヒロイズムへの偏向との対立構造において捉えなおすことである。過去の「習俗」を評価し、同時代の「習俗」を墮落したものと見なす考え方は、プラトンを参照するまでもなく普遍的に見られるものである。しかしながら従来の研究においては、18世紀フランスにおける「習俗」の概念の変容をめぐるジェンダー的な側面は看過されてきた。こうした側面に着目した本セッションは、満員の会場を含めて幅広い議論の展開される場となり、今後考察をいっそう深めていくためのきっかけとなった。（玉田敦子）

代表幹事再任にあたって

長尾伸一（名古屋大学）

名古屋大学事務局が本学会の運営に携わって早くも2年が過ぎました。不慣れなことが多くご迷惑をおかけしましたが、会員の皆様、幹事会の皆様のご協力を得て、何とか一期を務めることができました。今回の東大大会で新幹事会が成立し、再度代表幹事を務めさせていただくことになりましたので、この機会にいくつか思いつくことを書かせていただこうと思います。

本学会は本年で第37回目の大会を迎えました。会員の方の中には、日本18世紀学会はご自身がお生まれになる前から存在している古い学会だとお感じになる方も多いと思いますが、本学会は日本の学会としてはまだ若い団体です。その誕生は、1960年代末から70年代にかけて、先進工業国の社会が変貌していった時代にあたります。当時私は哲学的動機から科学方法論に関心を持つ経済学部の学生で、書くことを仕事にしたいと考えつつ、学問を自分の職業とするはっきりした予定はなく、学界の詳細な動向には無関心で、本学会の設立は知りませんでした。

しかし本学会を生み出したこの時代の知的雰囲気は、今でもよく覚えています。日本18世紀学会はその環境を反映して、啓蒙期の思想や文化や歴史を包括的に扱う日本唯一の学会ということ以外に、前後して誕生したいくつかの他の学会と共通する特徴を持っています。それは学問の制度化によって高まる知の専門性を尊重しながら、知的境界を乗り越え、異質な知識と思考の相互作用を促進し、知的冒険を試みることで、総合的な視野を獲得し、つねに更新し続けようという、越境的な志向性です。

国家財政の破綻や技術をめぐる国際競争の激化、急激に進む社会の高齢化の中で、現在人文系学術の制度的基礎が揺らぎ始めていますが、こうした中では、以上の特長を持つ本学会の役割はさらに大きくなっていくことでしょう。幹事会と名古屋大学事務局は学会の円滑な運営を図りながら、残る2年の間にその方向を探っていきたいと思います。以下はそれに向けた私見です。

社会の人口構成の変化や転々とする大学政策によって、大学を拠点とした人文的学術研究を学会等によって補完する必要は、ますます高まると予想されます。任意団体である学会は教育、研究機関に所属しないindependent researcherに自由に研究資源を提供することができます。とくに高齢化社会を迎える日本の場合、退職されたヴェテラン研究者への学会によるサーヴィスを向上させ、引き続き知的生産を担っていただく環境を提供することが、今後重要となっていくでしょう。それは「記憶の学問」という性格が強い人文的、歴史的研究分野では、学術的にとりわけ大きな意味があります。また今後人文系の研究職の大幅な増加が望めない中で、若手の研究者のみなさんの研究を学会が今以上

にお手伝いをすることも大切です。HPの充実など大会開催以外の学会サービスの向上と、最適な会費のあり方の模索などによって、それらの課題に応える方策を考えていく必要があります。

さらに本学会の学術的な発展として、今までの学際研究の振興に加え、以下の3つの知的な越境の可能性があります。第一に、本学会は日本の学会でありながら、その会員は同時に国際18世紀学会の会員となるという国際性を持っています。最近欧米以外のラテン・アメリカや東南アジアなどにも新学会が誕生し、それぞれの地域での活動も始まりつつあります。本学会はアジア地域最大の学会であり、すでに十数年にわたってお隣の韓国学会と交流し、協力を積み重ねてきましたので、今後アジア地域での国際的な交流を推進し、国の単位を超えた空間的な越境を進めて、18世紀研究における国際的なフォーラムとしての機能を高めていくことができると思います。

第二に、本学会は「知の越境」である学際研究を一つの柱としています。啓蒙期の知識人たちは、現代の学問区分ではさまざまな専門領域に分かれている知の領域のほとんど、あるいはすべてを一人で自由に旅し、咀嚼して作品を生み出した人々でした。諸学問の成熟につれ、本学会がかかわる諸分野での専門化もいっそうすすんでいます。反面緻密な資料操作による実証研究の進化は、研究対象が持つ本来の結びつきによって、異なる専門家同士の思わぬ遭遇と対話を可能にします。啓蒙期の思想、文化、歴史の総合的研究を目指す本学会が扱える知識の領域をいっそう拡大するために、さらに多くのさまざまな分野の方々の参加をお願いしていく方策を考えていくことも大切です。

第三に、空間的、知的越境に加えて、時間的越境も考えられます。「18世紀」的对象は1700年に生まれ、1799年に消滅するものではありません。狭義の18世紀以前、あるいは「長い18世紀」など、本学会が扱う時代を対象の実体に即して、学術的に柔軟に考察し、ときには世紀の前後を扱う研究者、学会との協力を行うことが必要です。とくに本学会はアジアの学会として、これにアジア史からの視点を加えて、国際学会に時代区分の点から新しい見方を提起することができると思われれます。

以上はそれぞれ大きな課題で、任期中にすべてを具体化できるものではありません。会員の皆様の負担を増やすことがないように、拙速を避けて構想を練り、随時皆様にご提案させていただこうと思っております。皆様のご協力を重ねてお願いいたします。



事務局より

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。事務局移転に伴い、郵便振替口座も変更となりました。今後は以下の振込口座へ会費の納入をお願いいたします。

<郵便口座振替で振り込む場合>

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会事務局

<銀行等から振り込みする場合>

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局までお申込み下さい。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りませす。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

寄付のお願い

前号以来、以下の方から寄付がありました。お礼申し上げます。

加藤芳子	3口	3,000円
計	3口	3,000円

また寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願いたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお昨年9月より、新しいメーリングリストを稼働しております。これまでメーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：出羽尚、王寺賢太(国際幹事)、大石和欣(常任幹事)、隠岐さや香、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、小関武史(常任幹事、年報担当)、斉藤渉、坂本貴志(常任幹事、年報担当)、武田将明、玉田敦子(常任幹事)、寺田元一(東アジア交流担当)、長尾伸一(代表幹事)、馬場朗、逸見龍生(常任幹事、年報担当)、増田真

会計監査：安室可奈子、真部清孝

日本18世紀学会ニュース 第79号 2015年10月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 長尾伸一

事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局

e-mail: jsecs.nagoya.uni@gmail.com

tel: 052-789-2380

fax: 052-789-4924

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>